

短小で良かった！（泣）

女だけの悪の組織に潜入した
スパイの男が見つかって万事休すの所、
短小だからスパイのわけがないと
誤解されて助かる話



玉子王子 著

1章 悪の組織に潜入したスパイに早速危機が。何とか逃げるも、股間の写真を撮られて笑い者に。

山奥の森の中。

むしろ逆に目立ちそうな所に、悪の秘密結社ゴールドクラッシャーの秘密基地の一つがあった。一様、衛星からは見えないデザインになっている。

若い女性ばかりが、体操服のようなタイトのような、変な服を着て生活している。

あまり意味もなく小銃を担いでいるのは、暴発の危険を高めるだけではないだろうか。

Tはスパイである。

インターポールの調査官として、この悪の組織を調べにきていた。

「キ○タマ！」

「潰せ！」

出入り口を見張る女の叫びに、通ろうとしている女が答える。

キュ、とTは股間が縮む気がした。

Tも周りの女たちと同じ、体操服のような妙なタイト姿だ。



Tも周りの女たちと同じ、
体操服のような妙なタイト姿だ。
体型としては女性。
ナノテクによって骨格などを変えて、
女の体になっていた。
ただ、一部。
一番肝心な

**股間は
変化しない。**

しないが、
彼なら大丈夫と上司は考えた。
「Tなら大丈夫よね。だって

**おチンチ○
小さいもん」**

そういつて笑う女性上司に
殺意が沸いたのを覚えている。

体型としては女性。

ナノテクによって骨格などを変えて、女の体になっていた。

ただ、一部。

一番肝心な股間は変化しない。

しないが、彼なら大丈夫と上司は考えた。

「Tなら大丈夫よね。だっておチンチ○小さいもん」

そういつて笑う女性上司に殺意が沸いたのを覚えている。

Tの竿は極端に小さかった。

まあ、性交に問題が無いサイズではある。

が、その範囲で留まる中では最小。

健康な中では最も小さい部類と考えられる。

肉玉は並の大きさなので、不思議といえば不思議。

それらは、女装用の股間押さえ器具で隠している。

特注だ。

竿が細すぎ、市販の物の中で一番小さいものでも上手くつけられなかったのだ。

つけたまま尿が出来る優れもの、という商品だが、物が小さいため、彼の場合外してやってくれとのことだ。

——ああ、世界が俺の短小を責める。

ムカつきつつ、トイレに入る。

「キ○タマ！」

「潰せ！」

——何だよこの符丁は。っていうか、そこら中で叫んでるんじゃ符丁の意味ねえよ。

むしろ、スローガンを刷り込む意味の方が強いだろう。

「あら、Tじゃない」

「あ、先輩」

声もしっかり女性である。

同じ部隊に配属された少し先に入った先輩女性に返事をして、自分の声とは思えず少し動揺するTだが、スパイとして表には出さない。

便所は、すべて個室だ。

当然、といえる。

ゴールドクラッシャーには男のメンバーはいないのだ。

個室に並んではいる。

「ねえ、Tはなんでゴールドクラッシャーに？」

「え、それは……」

「私は、男のあれが大嫌いだから。チ○ポもそうだけど、特にキ○タマ」



きつい拘束を外され、少し解放された短小が普段以上に縮む。

「すべてのキ○タマに去勢を、っていうゴールドクラッシャーのスローガンに憧れたの。本当にそう
なったらどんなにいいか……Tもそう思うでしょ？」

「も、もちろん」

目線を下げる。

胴体にへばりつくほど縮み上がった肉玉を見る。

——み、見つかったら絶対キ○タマやられる……

玉が潰れようと、ナノテクで治る世界だ。

だが、だから玉をやられていいとは男は誰一人思わないだろう。

「あ、そういえば……警察が私たちのこと探ってるみたいよ。でも、うさぎ県の警察は婦警ばかり
だから詰まらないわね」

「そ、そうですね」

「男の警官がスパイに入ってきたら……」

隣の個室で嘔き出す先輩。

「キ○タマ潰しと再生、百回ぐらいしてやるんだ」

——やべえよ、この組織。絶対潰さないよ。

と、ブザーが鳴る。

「あ、非常個室よ！」

個室の戸が開く。

「ああっ！」

真っ青で、必死に女装器具を装着し、ズボン上のタイツを引き上げる。

その一瞬後、先輩が前を通る。

「さ、早く！」

「は、はい」

——ってというか、非常呼集だからって便所の戸が勝手に開くか？

短小用の特注器具さえつけられないほど縮み上がりつつ、先輩について走る。

広い部屋に、千人ぐらいの若い女性がずらりと並んでいた。

Tもその中のザコ戦闘員として立つ。

かなり前のようにいる、巨乳女性が何か叫んでいた。

よく聞こえないが、内容は伝わってくる。

「スパイだって」

「インターポールの」

「男だってさ」

「こりゃ見つけ次第キ〇タマ祭り開催ですわ」

唾を飲むT。

探索が始まる。

部隊として指定された地区に向かう。

外の森の、Tにはどこかわからない場所だが、隊長であるザコ怪人——と言っても普段は普通の女性、戦闘時の強化服が戦闘員とは違うだけだが——にははっきり場所がわかっているようだ。

今の所、皆戦闘服も着ず、普段のタイツ姿である。

しばらく探索が続くが、当然見つからない。

調べる側にいるのだから。

スパイがきた、とわかっているようだが、それは調べにもぐりこんだと認識されているようだ。

素性を偽って採用されているとは夢にも思っていないようだ。

——これなら助かるな。

ほっとすると、急に尿意を感じる。

周りの仲間気づかれぬように離れ、茂みの中に入る。

「ふう……」

ジョボジョボと、短小から液体。

茂みの中で、完全に隠れているつもりだった。

だが、実は股間の前に少し空洞があった。

枝が枯れたりして、葉が無い部分があったのだ。

森が完全に平坦なら、気づくものもいなかっただろう。

しかし高低差があり、ちょうど彼がいる場所は少し高く、前は少し下がっていた。

そこを通る一人の戦闘員女性。

それが、ふと水音に振り返る。

振り返りつつ、仲間が小便しているのだと気づく。

すぐに目をそらそうとする。

が、そらせなかった。

「え？」

目を見張る戦闘員。

相手は、しゃがんでいない。

少し高い位置、茂みの中に突っ立っていた。

そしてズボン上のタイツを下げ、そこから驚くほど小さく、皮に包まれた一物を突き出していた。

「あひ……」

頬を引きつらせる戦闘員。

懐から携帯を取り出し、写真を撮る。

「ち、小さい……小さいチ○ポ……」



声を絞り出す。

「短小チ○ポ発見！ これよりキ○タマ潰します！」

飛び上がるT。

茂みの中で安全なつもりだったが、気づかれた。

よく見ると、茂みの隙間からでも向こうは見える。

が、かなり見ないとわからないのに、なぜ気づかれたのか疑問に思う。

——見えるはずなのに……特に、俺の小さいし……

自分でそう考えてしまい、ガッカリする。

が、そんな状態でもすぐに踵を返して遠くに走って逃げる。

ということはしなかった。

服装を整え、その場は素早く去るが、逃げ去らずに部隊に紛れ込む。

「見つけたって！」

「超チ○ポ小さいらしいよ！」

「短小のスパイなんている！？」

「でも、写真が」

回って来ていた。

というか、全メンバーに一斉送信されたようだ。

別に股間だけ見せる意味はないと思うが、念のため少しでも情報を増やすためのようだ。

調べている間は見ている時間もなかったが、夜まで探し、部隊で引き上げた後、宿舎で見ることが出来た。

確かに、自分のモノだ。

宿舎は、沸いていた。

他の部隊も談話室に集まり、百人からの女性が楽しげに話している。

「超小さいねえこのチ○ポ！」

「って言うかありうる？ 小指じゃん！」

「自分の親指の方が巨根だよこれじゃ！」

「それやばーい！ って言うか、指巨根って！」

「……」

まったく聞きたくない、容赦ないガールズトーク。

しかしこれほど盛り上がる話題が投下されたのに、談話室に一人だけ行かないのでは怪しまれる。

仕方なく入り、端のほうでいようと思った。

しかし部隊がど真ん中にいるので、Tも呼ばれてそこにいざるを得ない。

左右に巨乳戦闘員が座り、一人が肩を組んで腕にオッパイを押し付けてくる。

そうしながら、スマホの画像を示す。

「ほら見なさいよT！ これ、超租チンだよ！ ありえない？」

「あ、いや、どうなのでしょう」

「あら！ 処女なんだ？」

「まあ、その方が幸せよね。私、一回だけ付き合ったけど、セックスだけ目当てのクソチ○ポだったから。でも、これよりかなりデッカかった」

「私も一人だけ付き合った！ 浮気しやがったからキ○タマ蹴り潰してやったけど……そのクズの半分ぐらいじゃない？ 短小気にしてたんだけどね、そいつも」

「って言うか、ぶっちゃけこんだけ小さいと銭湯とか入れないよね！」

「案外「気にしてません」ポーズで入るかも！」

「横通る背丈三分の一の子供と、チ○ポ直角だったりして！」

「ぎゃははは！ 直角ならいいじゃん！」

「やさしいねえ！ 絶対直角じゃないに決まってるのに！」

「包茎凄いわ！ 皮だけ巨根並み！」

「たしかに、これならかなりのデカチ○ポでも収納できるよ！」

「皮巨根！」

「クリの方がデカイかもね！」

「ちょっと、そりゃ言いすぎでしょ！ でも、これより大きいクリは絶対あるね」

「まあ確実にいえるのは、男として終わってるって事だね！ 長さはエッチギリギリだとしても、太さは」

「いや、立たないとわからないよ！ 立ったら三十センチかも！」

「奇跡の膨張率！」

「いやいや、ありえるかもよ！ 立っても大して変わらないんじゃ、神様残酷すぎるでしょ！」

「これぶら下げてたら、私生きられないわ！」

「……」

侵入者がいたと騒ぎ、結局見つからなかった割に大盛り上がりの戦闘員たち。

俯き加減で、半端に愛想笑いを続ける。

黙っていれば、騒ぎも収まるはずだ。

そうすれば、あとは寝るだけ。

しかし、男としてそれでいいのかとは思う。

が、ならどうするか。

これがそんなに小さいのか、と叫んで勃起した一物を見せても爆笑の後捕まって金潰しが落ちだろう。それも何度も治されてしつこく潰され続けそうだ。

大体、今の精神状態で立つとはTには思えなかった。

——でも、黙ってはいられねえよ。

「あ、あの……」

「ん？ 何Tちゃん」

「ち、チンチ〇の大きさがそんなに重要なんでしょうか？」

仮に、重要じゃないといわれたら、どうだというのか。

自分のが短小である事には変わりはない。

だが、ほかにいえることもなかった。

それに、勝算もある。

大きさがすべて、というのは普通言われる話とはかけ離れているではないか。

「ん、Tちゃん面白いこと聞くね」

隣の巨乳が笑う。

そして、「太陽は一つしかないでしょう」というように、あっさりという。

「チンチ〇は大きさがすべてでしょ」

凍りつく。

が、それはTだけだった。

他のものはまったくそんな事はなかった。

「そうだよ。何言ってるの？」

「何本か入れられればわかるよ、明らかに大きい方が気持ちいいって」

唇を噛む。

話が違うではないか。

「ちょ、ちょっと待ってください。大ききなんて意味ないんじゃ……」

と、周囲の女たちが全員笑い出す。

先ほどから楽しそうに笑っていたが、今の笑いは、先ほどまでのが結構お愛想もあったと気づかせるほど、心底楽しそうだった。

「Tちゃんなに男みたいなこと言ってるの」

「ああ、この子処女で、おマ○コでチ○ポのサイズ比べたことないから」

「それじゃわからないわね。私も長く付き合っただの一人だけど、セックスした相手は何人もいるから」

「ってというか、皆そうじゃない？」

「そうだよね。それで、その何本か比べた上で言うんだけど……おチンチ○の価値は大ききだと思ってる人」

全員が当然のように手を挙げていた。

汗が噴き出す。

あまりの答えに、手足が震え始める。

——う、嘘だ。だって普通言われることと全然違うし……

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。だって、大ききは意味ないってよく」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ。だって、大ききは意味ないってよく」

「あははは！ ここまでの話でわからない？」

「仕方ないわねえ。処女のTちゃんに教えておくけど……」

チラチラ、と顔を見合わせる女たち。

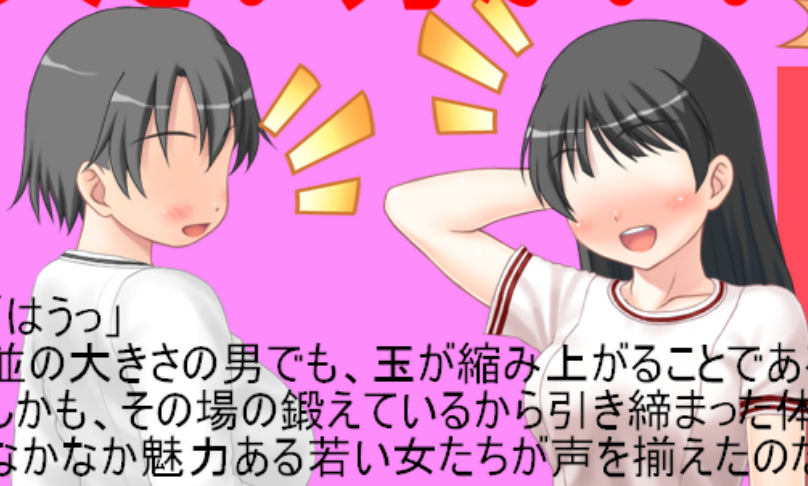
この談話室には百人からの若い女、大人の女たちがいる。

それらが一斉に声を合わせる。

「チンチ○は、
大きい方がいい！」

「はうっ」

並の大ききの男でも、玉が縮み上がることである。しかも、その場の鍛えているから引き締まった体の、なかなか魅力ある若い女たちが声を揃えたのだ。



「あははは！　ここまでの話でわからない？」

「仕方ないわねえ。処女のTちゃんに教えておくけど……」

チラチラ、と顔を見合わせる女たち。

この談話室には百人からの若い、大人の女たちがいる。

それらが一斉に声を合わせる。

「チンチ〇は、大きい方がいい！」

「はうっ」

並の大きさの男でも、玉が縮み上がることである。

しかも、その場の鍛えているから引き締まった体の、なかなか魅力ある若い女たちが声を揃えたのだ。

並外れた短小のTには朝気づいたら一物に犬が噛み付いていたのに気づく以上のショックだった。

「あ、あばばば、で、でも普通言われている……」

「そのフレーズ多くね？　三回目じゃない？」

「っていうか、あはは。Tちゃん男みたいよ？　マジで」

「そうそう。その、チンチ〇は大きさじゃないって言うの……チンチ〇は大きい方がいい、ってわけじゃないって言うのってさ……」

「はい、常識……」

「ぶっちゃけ、チ〇ポ小さい男の人を慰めるために、女が皆でついでに嘘だから」

眩暈がする。

が、スパイとして鍛えられたTは表向きは平気な顔だ。

それに向けて、女たちがうなづく。

「そうそう。チ〇ポが大きさじゃないなんて、短小チ〇ポの、情けない可哀想な人のための嘘。ペ〇スはでっかい方がいいに決まってるでしょ。奥まで届くし、強くこすってくれるんだよ？　大きい方がいいに決まってるでしょ」

「蚊に刺された所、強く搔いた方が気持ちいいでしょ？　軽くしか搔けないんじゃ、満足できないでしょうが」

「大きさじゃないなんて、奥さんや恋人に見せるたびに、心の中でため息つかれてる人用の優しい嘘」

「だって、本当のこと知ったら、そういう短小チ〇ポの人たち、EDになりそうだし」

「でも、女同士で本音で話せる場所なら……ねえ」

「ペ〇スはデカイのがいい。巨根こそ最高。それって当然の事よね」

「まあ、男は知らないでしょうけど」

「あと、Tちゃんみたいな処女ね」

「何本か啜ればすぐわかるよ」

「でもまあ、ここにいるってことは、もうそういうことはしたくないってことよね？」

「それじゃ、スローガン叫びますか」

頷く女たち。

手を開いて突き上げる。

何かを握り潰すようなしぐさをしつつ、叫ぶ。

「すべてのキ○タマに去勢を！」

「すべてのキ○タマに去勢を！」

「すべてのキ○タマに去勢を！」

「すべてのキ○タマに去勢を！」

「すべてのキ○タマに去勢を！」

「すべてのキ○タマに去勢を！」

「そして、チンチ○は大きいのがいい」

「やだ！ 男に聞かれたら困るよ！」

今まで散々そういう内容を口にしておいて、誰かがカマトトぶる。

別の女が笑って手を振る。

「大丈夫よ。嘘も流されてるけど、本音だって表に出てるじゃない。でも、男は信じないもん。っていうか、都合がいいほう信じるのよ。小さい人は、優しい嘘を」

「だから小さいままなのよ！」

「いや、何信じてても短小の人は短小だから！」

ぎゃはははは、ともう心底楽しそうに笑う女たち。

椅子に座り込み、力なく笑うT。

と、机の上に置いた携帯を手にする者がまた出始める。

「っていうか、本当にこの侵入者チ○ポ小さいよねえ！」

「実物はもっと小さかったりして！」

「ありえないよ！ っていうか、これ以上小さいチ○ポだったら、私スパイとは認めません！」

「ちょっと！ ……でも、まあ確かにスパイは女落とす必要だってあるんだから……これ以上小さいチ○ポじゃ採用されないよね」

「これでもごっついコネがいるけど！」

「だよー！ 超短小チ○ポだもん！ でも、キ○タマは普通というね！」

「何で小さいんだろう、タマタマ普通なのにねえ！」

自分の男性器の写真を見ながらグラグラ笑う女たちに囲まれながら、引きつった笑いを浮かべているしかないT。

体験版終わり

これからTは直接短小を見られて罵られまくり、

しかも小さいのでスパイのはずがないと確信されます。

そして自らスパイと名乗り出ても短小なので信じてもらえないという

男としてガッカリするしかない展開が待っています。

続きは製品版でお楽しみください